
電波とキチガイと僕

冬樹楽生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

電波とキチガイと僕

【Nコード】

N1259BA

【作者名】

冬樹楽生

【あらすじ】

ブログやmixiで書いていた詩小説を、再構築して書いていきます。

注意

この詩小説には残酷な描写、不快になるような描写が多分に含まれています。

ハッキリと好き嫌いが分かれるような内容になっていきますので、観覧には注意してください。

詩と小説の間を目指してますので、ストーリーを重視される方はガツカリするかもしれません。

とても暗く、グロテスクです。

AとBとCの瑣末な日常（前書き）

後悔は、しませんか？

AとBとCの瑣末な日常

雨が降っている、テレビのノイズみたいに。

病院の二階、角の部屋。

「よく降る雨だ…こんな日はよく家の裏庭に蝸牛かたつむりを見に子供達が集まったもんでねえ…その子供達の頭をもいで、その頭の方の切口をつけて吸うと、甘い蜜が口の中一杯広がるんですよ…あれは美味かったなあ…それにしても、よく降る雨だ…」

Aはベッドの手摺を右手の人差し指で、一定のリズムで叩きながら言った。

「そうだ、お母さんが下さったまんじゅうがあっただけ…忘れてた忘れてた」

Bは枕元の棚をゴソゴソと探り始めた。

「帰ったら最初に洗い物を片付けて…だんなの為にビールを冷やしとこうかねえ、あの女の所より冷たくて…心臓が止まるくらい冷たくしておこうかねえ」

Cは金属が擦れるような声で笑ってる。

Aは、入口を通り過ぎる子供をじっと見ている。

Bは、カビだらけのまんじゅうをにこにこしながら食べている。

Cは、小さな声で泣いている。

雨が降っていた、すべてが終わった後の、ノイズのように。

Iの無意味な眩き

雨が降っている、誰かの後悔を消そうとして。

照明の消えた病室、隅にポツンとベッドがあり、独りの男が顎先をカリカリと引つ掻きながら眩いていた。

「永遠に続く幸せはありえない、人が感じるすべての感情は誰かから奪って感じるものなのだから、奪うという事は奪われるという事だ、やがて奪われるという事だ、奪われたくなければ奪い続けるしかない。…けれど奪ったものが増えれば増えるほど不安は大きくなる、そしてやがて奪ったものと不安そのものに押し潰される、今感じている幸せが本当に幸せなのかなんて、誰にも解らないし答えなんて最初から用意されていないのだから………永遠に続く幸せはありえない人が感じる………」

そしてIの夜は明ける事は無い。

雨が降っていた、誰かの償いを消しながら。

長い髪の女だった固形物

雨が降っている、何かを消そうとして。

病院の屋上、フェンスの向こう側に長い髪の女。

「……さようなら、さようなら……私、私、さようなら」

雨が光を吸って輝きながら降り注いでいる。

長い髪の女は前へと一歩踏み出した。

まるでそれが当たり前の動作のように、呼吸のように、いいえ本当は、追ってくる何かから逃げるように……

落下する肉体、通りすぎる窓……窓……窓……窓……地面。

そして女は固形物になった。

病院から何人かの医師が飛び出した、昔、長い髪の女だった塊を担架に乗せて病院へ戻る。

雨が降っていた、もうその跡さえ消してしまった。

月の隠れた夜の話

雨が降っている、深い憎悪の中で。

深い闇が狭い病室を埋め尽くしていた。

分厚い雲に月さえ隠され、僅かな灯りさえ視界に存在していない。

Wは手探りで煙草を取り出し、火を着けた。

暗闇の中で煙草の火口がWの呼吸に合わせて光を強弱させる。

「死ぬときは誰にも見付からずに死にたい、誰にも認識されなければそれは死ではない、いや死だけではなく、全ての事象は第三者に認識されてこそ存在することが出来る、だからつまり…すなわちそれは………不死だ………フククッ」

濁いた笑いと、煙草の煙が部屋に充滿している。

雨が降っていた、深い慈愛の中で。

Dと煙草と流星となにか

雨が降っている、湿った空気と手を繋いで。

Dは病院の屋上で煙草を吸いながら、雲を見ていた。

雲が自由に見えたDは、そっと手を伸ばそうとしてやめた、届くはずが無い事を、知っていたから。

「悲しいな…自由を求める事が、一番の不自由を招いた、誰よりも自由であるために、大事なモノを数え切れないほど捨ててきた、残ったのは今にも生きる事を諦めそうな、壊れかけの心臓と、煙草と1000円ライターだけだ」

煙草をコンクリートに押し付けて火を消すと、次の煙草を取り出そうとセブンスターを胸ポケットから取り出した。

・・・空・・・

逆さにすると、煙草の葉がパラパラと落ちてゆく。

「はい、おしまい」

Dは小さく呟くと、点滴の針を力任せに引き抜いた。

目を閉じる、視界が闇に染まった。

その闇をじっと見ていると、奥底に光が見えた気がした、その光がなんなのか、目を凝らしていると、Dの意識はその光の中に沈んでいった、そしてDの心臓は、生きる事を諦めた。

雨が降っていた、月明かりに照らされて、夜空に無数の流星を描きながら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1259ba/>

電波とキチガイと僕

2012年1月3日01時45分発行